

令和 4 年 5 月 29 日現在

機関番号：32636

研究種目：研究活動スタート支援

研究期間：2019～2021

課題番号：19K23177

研究課題名(和文) ホッブズとロックの宗教論 17世紀半ばイングランドの脈絡から

研究課題名(英文) Hobbes and Locke on religion in the context of the English Revolution

研究代表者

岡田 拓也 (Okada, Takuya)

大東文化大学・法学部・講師

研究者番号：20846646

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 1,600,000円

研究成果の概要(和文)：本研究では、17世紀イギリスの政治思想家・哲学者として知られるホッブズとロックを取り上げ、彼らの宗教論を17世紀半ばのピューリタン革命の脈絡に位置付ける研究を行った。ホッブズの主著『リヴァイアサン』の宗教論が同時代人の議論を踏まえている可能性を、ホッブズと同時代人のテキストの綿密な比較により実証的に示した。そしてその成果を国際的な学会や学術誌で発表した。また、ロックの初期の宗教論をピューリタン革命期の寛容論争に位置付ける研究を進めた。

研究成果の学術的意義や社会的意義

ホッブズやロックの政治思想・宗教思想は影響力が大きく、今日の日本でもよく知られている。本研究は、このような彼らの思想が同時代のどのような課題や論争を念頭に置いて生み出されたのかを明らかにしてきた。これにより彼らの思想について、ひいては政治と宗教の関係について、理解を深めることが出来た。この研究結果は海外の有力な学術誌に発表することが出来、国際的にも認められる水準の研究が出来たと言える。

研究成果の概要(英文)：This study has considered the religious thought of Hobbes and Locke in the context of the English Revolution. In particular, it has explored the possibility that Hobbes used the argument of his contemporary thinkers in writing the religious part of Leviathan.

研究分野：西洋政治思想史

キーワード：ホッブズ ロック

### 1. 研究開始当初の背景

トマス・ホブズとジョン・ロックは17世紀イングランドにおける第一級の政治思想家として名高い。当時は政治と宗教の関係を巡って様々な論争が行われており、ホブズとロックもこの論争に参加し、独自の宗教思想を展開した。そこで、ホブズとロックそれぞれの宗教思想を理解するには、宗教を巡る当時の議論や論争と彼らの思想がどのように関連するのかを明らかにする必要がある。本研究でホブズとロックの背景として着目するのは、両者に共通して重要な時期、すなわち1640年から1660年頃までのピューリタン革命期である。

以下ではホブズとロックそれぞれについて、研究の背景をより具体的に述べていきたい。

まずホブズについてである。ホブズの主著『リヴァイアサン』における宗教論は独特なものとして知られている。このホブズの議論の背景には、1640年から1660年頃までのピューリタン革命期において新たに登場した様々な議論や論争があると考えられてきた。そこでこれまでも、『リヴァイアサン』(1651)の宗教論と当時の論争との関連性を探る研究がなされてきており、私自身もこの点について考察してきた。だが依然として『リヴァイアサン』の宗教論には十分に説明されていない点も多い。

次にロックについて述べたい。ロックは1660年頃、彼がまだ若かった頃に、『世俗権力二論』を執筆し、その中でキリスト教の異なる宗派間の寛容に関わる問題を論じた。ただしその際にロックは、寛容の問題一般を論じるというよりは、聖書に明確に規定されていないこと(indifferent things)についてキリスト教徒の市民は主権者に従うべきかという特定の問題について論じた。この議論は、後に古典的著作『寛容書簡』(1689)を著すことになるロックの出発点になるものだった。だがロック研究において広く知られているように、寛容を擁護する後の時期と異なり、『世俗権力二論』の段階ではロックは主権者の力を強調した。そこでこれまでの研究では、『世俗権力二論』から『寛容書簡』に至るまでのロックの議論の変遷に関心を向けるものが多かった。『世俗権力二論』におけるロックの議論を当時の脈絡に位置付ける際にも、聖書に明確に規定されていないことに関する当時の論争に着目するものが多かった。しかし以上の研究では、ピューリタン革命期の寛容論争に照らしてみたとき『世俗権力二論』の議論がどのように見えるかは等閑視されてきた。

### 2. 研究の目的

以上に示した様に、ホブズの『リヴァイアサン』とロックの『世俗権力二論』それぞれについて、既存の研究では未解明な点がある。このことを踏まえ本研究は、ホブズとロックの宗教論とピューリタン革命期の宗教を巡る論争との関連性をより明確に示すことを目指している。それにより、ホブズとロックの議論がどのような議論を前提としており、どのような特徴を有し、何をを目指していたのかがより一層明らかになるだろう。

### 3. 研究の方法

まずホブズの『リヴァイアサン』について述べたい。『リヴァイアサン』の宗教論のうち今回着目したのは以下の二点である。一つは終末論で、聖書に記述されている「天国」や「地獄」についての具体的な意味内容などを解明する議論である。もう一つはキリスト教の異なる宗派間の寛容や良心の自由に関する議論である。

前者の終末論に関しては、より具体的には2つのポイントに着目した。一つは人間の魂が不死であることを否定するホブズの議論である。この点について、同時代人のリチャード・オーヴァトンがホブズに類似の議論をしていることが知られている。また私自身も以前にオーヴァトンとホブズの議論を綿密に比較参照し、共通点を明らかにする研究を行った。今回は以上を踏まえ、1640年代の内戦期のイングランドにおいてオーヴァトンの議論がどの程度流布していたかを調査した。それにより、ホブズがどのような経緯でオーヴァトンの議論を知りえたのかについて、手がかりを得ようと努めた。終末論に関して私が着目したもう一つのポイントは、「天国」は実のところ地上にあるというホブズの議論である。このことを証明するためのホブズの議論には同時代人のアーチャーと類似した点があると、既存の研究において指摘されてきた。私はこの指摘をもとに、アーチャーの他にホブズと類似したことを主張した人物がいなか探った。そしてホブズとアーチャーらの議論が具体的にどの程度類似しているのか綿密に検討した。さらに、アーチャーの展開した様な議論がピューリタン革命期においてどの程度一般的でどの程度特殊だったのかを、当時の様々な終末論との比較検討を通して明らかにした。

寛容を巡るホブズの議論については、理解の手がかりとなる同時代人として、寛容を強調したピューリタンの様々な論者や、王党派として例外的に寛容を説いたジェレミー・テイラーに着目した。これらの人物、特にテイラーについては、私はこれまでの研究でも着目してきた。今回はそれを踏まえ、テイラーとホブズにいかなる共通点があるのかを改めて検討した。そして、ホブズとテイラーの共通点は、革命期のピューリタンや革命期前の有力な論者チリングワースの様な他の同時代人にも共有されているのか、それともテイラーとホブズに特有なのかを考察した。とりわけこれまでの研究で、独立派というピューリタンのグループがホブズと近似

していると指摘されてきたことを踏まえ、独立派、ホッブズ、テイラーそれぞれの立場の関連性について詳しく調査した。

次にロックについてである。ホッブズやテイラーなどの寛容を巡る議論を検討する上述の研究は、ロックの研究の前提になるものだった。なぜなら、ロックの『世俗権力二論』をピューリタン革命期の寛容論争の脈絡で明らかにするためには、まず革命期の寛容論争について理解を深める必要があるからである。ただし、ホッブズやテイラーの研究では主として彼らが著作を公表した1650年頃までを中心として研究してきた。そこでこの研究では不足する部分、すなわち1650年代後半や1660年頃の寛容を巡る議論へと調査対象を広げた。

#### 4. 研究成果

以上の研究は最終的に海外の学術誌で公表することを目指してきた。ホッブズについては終末論と寛容論それぞれについて1本ずつの論文が海外の有力な学術誌でアクセプトされ、公表された。また論文執筆の過程で、国内および国際的な研究会で研究発表をし、有益なコメントや示唆を得ることが出来た。

ロックについてはまだ研究途中であるが、論文の構成や各章の内容が固まりつつある。今後はこの研究成果を国内や海外の学会で発表し、最終的に海外の有力な学術誌に掲載されるように研究を続けていきたい。

その他、以上の研究を続ける中で、ホッブズについて解説や書評の執筆、ロックに関して書評の執筆を行った。

## 5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計4件（うち査読付論文 2件/うち国際共著 0件/うちオープンアクセス 2件）

1. 著者名 岡田拓也	4. 巻 44
2. 論文標題 書評: Jeffrey R. Collins, In the Shadow of Leviathan: John Locke and the Politics of Conscience	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 イギリス哲学研究	6. 最初と最後の頁 68-70
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 岡田拓也	4. 巻 45
2. 論文標題 書評: 上田悠久 『助言者 ホッブズの政治学』	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 イギリス哲学研究	6. 最初と最後の頁 38-40
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 OKADA TAKUYA	4. 巻 73
2. 論文標題 Hobbes's Eschatology and Scriptural Interpretation in Leviathan	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 The Journal of Ecclesiastical History	6. 最初と最後の頁 308 ~ 325
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) 10.1017/s0022046921000683	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 Okada Takuya	4. 巻 -
2. 論文標題 Taylor and Hobbes on toleration	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 History of European Ideas	6. 最初と最後の頁 1 ~ 17
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) 10.1080/01916599.2022.2080375	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である)	国際共著 -

〔学会発表〕 計2件（うち招待講演 0件 / うち国際学会 1件）

1. 発表者名 Takuya Okada
2. 発表標題 Hobbes ' s Ecclesiology in Leviathan and Episcopalians in the Late 1640s
3. 学会等名 26th IPSA World Congress of Political Science ( 国際学会 )
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 岡田拓也
2. 発表標題 Hobbes, Taylor, and Radical Tolerationists during the English Revolution
3. 学会等名 英文校閲ワークショップ・原稿検討会
4. 発表年 2019年

〔図書〕 計1件

1. 著者名 野口雅弘、山本圭、高山裕二編著	4. 発行年 2021年
2. 出版社 ミネルヴァ書房	5. 総ページ数 216
3. 書名 よくわかる政治思想	

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
---------	---------------------------	-----------------------	----

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8 . 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関
---------	---------